

# 梅若研能会

## 六月公演



令和4年6月16日(木)午後1時始(開場12時)  
於 観世能楽堂

Kanze Noh Theater  
GINZA SIX B3F, 6-10-1, Ginza, Chuo-ku, Tokyo  
Thursday 16 June 2022 Start 13:00(door open 12:00)

### 能「楊貴妃」・「熊坂」みどころ講座

6月4日(土)13:00~14:30

於・梅若万三郎家能舞台(渋谷区西原1-4-2)

受講料/講師 1,000円(※研能会入場券購入者は無料)

長谷川晴彦(はせがわ はるひこ) 昭和44年静岡県掛川市生まれ、平成元年梅若万三郎家入門。三世梅若万三郎に師事。公益財団法人梅若研能会評議員、観世流準職分。掛川市ふるさと親善大使。平成5年「小袖曾我」にて初シテ以降、静岡県掛川市、磐田市、島田市のほか都内各地、近郊で能の普及に努めている。

梅若志長(うめわか ゆきなが) 平成12年生まれ、梅若紀長の長男。祖父・三世梅若万三郎及び父・梅若紀長に師事。平成22年「合浦」にて初シテ、平成25年《千歳》披キ(初演)、平成25年秋「烏帽子折」の子方を勤める。令和3年「石橋」披キ。

YouTube 演目の見どころ解説動画を公開中!



Facebook フェイスブックはじめました! 公演情報更新中!



### 二十五世観世左近記念 観世能楽堂



東京都中央区銀座6-10-1GINZA SIX 地下3F TEL.03-6274-6579

- 「銀座駅」東京メトロ銀座線・日比谷線・丸の内線 A3出口2分
- 「東銀座駅」東京メトロ銀座線・都営浅草線 A1出口2分
- 「有楽町駅」JR山手線・京浜東北線・東京メトロ有楽町線 銀座出口10分

### 次回予告

9月15日(木) 於 セルリアンタワー能楽堂

舞囃子「松風」梅若万佐晴/狂言「鳴子遣子」シテ善竹十郎  
仕舞「小督キリ」遠田修/仕舞「雲林院クセ」古室知也/  
仕舞「融」八田達弥/能「賀茂」シテ梅若泰志



Noh[Youkihi] Hasegawa Haruhiko  
Kyôgen[Mizukumi] Nomura Mansaku  
Shimai[Hanjo kuse] Aoki Ichiro  
[Tenko] Tôda Osamu  
Noh[Kumasaka] Umewaka Yukinaga

入場料(全席指定)

指定席A 7,000円 指定席B 6,000円

※学生席(要学生証) 各席3,000円引き

お問い合わせ・お申し込み

e+ (イープラス)

<https://eplus.jp/ath/word/69495>

カンフェティ TEL 0120(240)540 (平日10:00-18:00)

<http://www.confetti-web.com/umeken>

## 公益財団法人 梅若研能会

〒151-0066 渋谷区西原1-4-2 TEL 03(3466)3041

《メールアドレス》 [staff@umewakakenohkai.com](mailto:staff@umewakakenohkai.com)

《ホームページ》 <http://www.umewakakenohkai.com>

能 楊貴妃

シテ(楊貴妃) 長谷川晴彦

ワキ方 土野口 琢弘  
ア イ(蓬萊島の男) 岡 聡史

大鼓 亀井 洋佑  
小鼓 田邊 恭資  
笛 槻宅 聡

中村 政裕 梅若 泰志  
梅若 紀佳 青木 一郎  
梅若 久紀 中村 裕  
古室 知也 加藤 眞悟

後見 青木 健一  
梅若万佐晴

地謡

狂言 水

(二時四十分頃)

汲

シテ(新発意) 野村 万作

ア ド(いぢや) 野村 裕基

休憩二十分

仕舞 班女  
クセ

天鼓

青木 一郎  
遠田 修

萩原 郁也  
梅若 紀長  
地謡 伊藤 嘉章  
八田 達弥  
中村 政裕

(三時三十分頃)

能 熊坂

前シテ(僧)  
後シテ(熊坂長範)

梅若 志長

ワキ(旅の僧) 福王 和幸  
ア イ(土地の男) 石田 淡朗

大鼓 柿原 孝則  
小鼓 幸 正昭  
太鼓 大川 典良  
笛 杉 信太郎

青木 健一 遠田 修  
梅若 久紀 伊藤 嘉章  
古室 知也 梅若 紀長  
梅若 泰志 八田 達弥

後見

梅若 紀佳  
加藤 眞悟

地謡

(終演予定 四時三十五分頃)

能 楊貴妃 (ようきひ)

シテの性格は、もちろん生きている人間ではないが、かといって地獄で苦しむ亡霊というわけでもなく、極楽ですべての迷いから脱して成仏しているわけでもない。不老不死の世界で、永遠に美しいまま、過ぎ去った玄宗皇帝との愛をただ一人忍び、すすり泣くのみだから、ある意味ではとても残酷な状態だといえる。主題は、生死による別離を超えた恋慕の情と、絶ちがたい愛情ゆえの哀傷だと言つてよい。「長恨歌」の愛の永遠を誓った比翼連理の名文句が、楊貴妃の美しさと愛の深さを強烈に印象付けているが、実はそれを裏切る別離の無常な哲理が蹄鉄に存在する。

狂言 水汲 (みずくみ)

新発意は修行中の身とはいえず、なにぶん若い男性のこと、いぢやに恋心をいだき、日の暮れた人気のない清水でデートを楽しみます。ここで謡われる小歌の数々は、中世の流行歌謡で歌詞の多くは「閑吟集」に収録されているものです。恋愛の表現を露骨にしないで上品にまとめる効果を上げています。抒情性に富んだ舞台が展開されています。

能 熊坂 (くまさか)

前場では、荒涼とした秋を舞台に、旅の僧の前に僧体の不気味な男が現れる。後場で現れた熊坂の亡霊は、怪異な表情の面に長範頭巾という独特の頭巾をかぶり、なぎなたをもって登場し、牛若との一騎打ちの場面を一人で表現する。詞章にあった所作で舞台上を縦横無尽に動き回る熊坂の痛快な奮闘ぶりは、見ていて気持ちがいい。同じ役者が、一方ではじつと動かない演技の中にすばらしい表現力を見せ、もう一方では「熊坂」などの激しい動きによる表現を見せるのだから、能の肉体修練の幅の広さに感心させられる。